

# 事実は各研究分野でどのようにできるのか

—科学的対話が生まれる文脈が本となり刊行—

## 概要

異なる事実のとらえ方があるために、人はすれ違えます。それは日常生活にとどまらず、異分野の研究者との交流でも起こります。こうした交流から、分断ではなく繋がるための連鎖を産むにはどうすればいいのでしょうか。

小俣ラポー日登美 白眉センター／人文科学研究所特定准教授、松本透 同／理学研究科特定助教、包含 同／情報学研究科特定助教、佐藤駿 同／理学研究科特定助教らは、歴史学、動物行動学、生物進化学、惑星物質科学、情報科学（人工知能）などのさまざまな分野を越えて、本来、比較が困難な諸研究を互いに比較しました。その結果、各分野の中だけでは見えなかった数々の「問い」が生まれました。本研究による領域横断的な議論の過程は、客観的で科学的な「事実」が共有されなくなっている現在のポスト・トゥルース（ポスト真実）時代にこそ、対話の道筋の構築に寄与することが期待されます。

本書は、2025年3月31日に、『事実の交差点——科学的対話が生まれる文脈を探して』のタイトルでナカニシヤ出版から刊行されました。



『事実の交差点——科学的対話が生まれる文脈を探して』表紙。オビ文は、元白眉センター特定助教で「バッタ博士」として知られる前野ウルド浩太郎 国際農林水産業研究センター主任研究員が寄稿。

## <研究者のコメント>

今回、他分野の研究者との方法論的比較を経験し、自分の研究を他者の目から相対的に見直すという点で、たくさん勉強することになりました・・・その結果、専門分野内のルールを守れば自然にうまれると思っていた客観性が、実は絶対ではないと実感されるようになりました。本書を執筆しなければ、「事実」はあらゆる分野を一貫して普遍的なものだと思っていたかもしれません。（第3章執筆者、佐藤駿）

## <書籍情報>

タイトル：『事実の交差点——科学的対話が生まれる文脈を探して』

著者：小俣 ラポー 日登美 編著（序章・2章・終章）、ジャン＝フレデリック・ショーブ（1章）、佐藤 駿（3章）、三中 信宏（4章）、松本 徹（5章）、包含（6章）

出版社：ナカニシヤ出版

## <出版社サイト>

<https://www.nakanishiya.co.jp/book/b10130951.html>

## <白眉センターHP>

<https://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/>

## <本書目次>

まえがき——それはどこの交差点だったのか？（小俣ラポー日登美）

序章 すれちがうたぐさの「事実」（小俣ラポー日登美）

- 一 ポスト真実——「事実」をめぐる危機
- 二 ノーベル財団と科学の「真実」
- 三 「原住民の科学」の問題
- 四 相対主義の足跡
- 五 ソーカル事件、もしくは「サイエンス・ウォーズ」
- 六 「事実」をめぐる対話の齟齬としてのソーカル事件
- 七 「事実」の複数の位相——ラトゥールの反省
- 八 「オッカムの剃刀」にあらがう
- 九 二重盲検と相対主義——「自分を疑う」という誠実さのために
- 一〇 「事実」をどう表し、伝えるのか？——言葉と数のはざまで紡がれるしりとり
- 一一 本書の各章の構成と内容
- 一二 比較できないものを比較する——Commentary に反映された対話の軌跡

第一章 どのように「事実」を構築するのか？——歴史家の仕事（ジャン＝フレデリック・ショーブ／小俣ラポー日登美（訳））

- 一 はじめに——歴史と過去
- 二 歴史学は西洋化の道具なのか
- 三 地球規模での曖昧さの解消
- 四 すべての社会的集団の歴史は可能か？
- 五 残存する痕跡、多言語的視点、実証された方法論
- 六 いかなる社会の歴史であっても誰もが記述しうるのか？
- 七 結 論

## Commentary 1 歴史学者より（小俣ラポー日登美）

### 第二章 奇跡と科学的「事実」の攻防戦——トリノ聖骸布をめぐる実験の解体（小俣ラポー日登美）

- 一 「史的事実」を求めるための実験
- 二 聖遺物とは——過去の遺物をめぐる真偽の攻防史
- 三 見えないものが、見える。見えるけれど、見せない。見えないから、見たい。
- 四 聖骸布の「事実」を実験する科学研究の類型とその発展小史
- 五 奇跡・科学・教会——事実をめぐる三つ巴
- 六 科学研究の背景とその行先
- 七 「あなたはこの問題に答えられますか？」——結語にかえて

## Commentary 2 動物行動学者より（佐藤 駿）

### 第三章 生き物の「こころ」は科学的「事実」になりうるか——動物行動学における科学論争の解剖（佐藤 駿）

- 一 動物心理学と行動生態学の「こころ」の科学史
  - ・動物心理学の成立史と擬人主義
  - ・動物の「こころ」と社会生物学論争
  - ・行動科学における動物の「こころ」に対する忌避感
- 二 現代行動科学における動物の「こころ」
  - ・動物の自己認知、意識をめぐる議論と対立
  - ・動物の向社会性の事例——細分化される動物の内的世界
- 三 動物の「こころ」を科学はどのように扱うべきなのか

## Commentary 3 生物進化学者より（三中信宏）

### 第四章 歴史と科学をつなぐ道——アブダクションの観点から（三中信宏）

- 一 はじめに——事実と虚構のはざままで
- 二 既知から未知への跳躍——アブダクションの視点
- 三 部分から全体へ、痕跡から物語へ
- 四 ダイアグラムによる可視化——ヴィジュアル・リテラシーを身に付ける
- 五 おわりに——アウェイな科学を訪ね歩く旅路とは

## Commentary 4 惑星物質学者より（松本 徹）

### 第五章 可視化から始まる「事実」——地球外物質のマイクロな世界への冒険（松本 徹）

- 一 実験室の片隅から——研究の入り口としての「見る」行為
- 二 人間と宇宙物質との関わり
- 三 リュウグウの砂の姿を言語化する
- 四 数値化される鉱物たち

五 地球外鉱物の成り立ちを理解する

六 宇宙探査の行く末と鉱物学

#### Commentary 5 情報科学者より (包含)

#### 第六章 人工知能が紡ぎ出す「事実」の権力性 (包含)

一 「事実」を産出する機械

- ・ 学習する機械
- ・ 学習を支える数理
- ・ 学習機械の肥大化
- ・ 基盤モデル

二 「事実」と価値観の対立

「事実」が直面する倫理的課題

- ・ 具体例——公平な予測
- ・ 公平な機械学習とその限界
- ・ 価値と対峙する「事実」
- ・ 「価値」を巡る権力構造
- ・ 人間の脱個性化

三 「事実」の権力性の彼方に

- ・ 価値を普遍化する
- ・ 技術を特殊化していくために
- ・ 技術を客体化していくために

#### Commentary 6 歴史学者より (小俣ラポー日登美)

#### 終章 めぐりあうたくさんの「事実」(小俣ラポー日登美)

一 つながる「事実」

二 日本における文理の溝の成立小史

三 「二つの文化」の成立

四 社会からの要請としての有用性と学問の分断

五 科学的真実と道徳的真実——社会生物学論争再考

六 「役に立たない」研究が存在意義を追求するとき——「原住民の科学」の問題ふたたび

七 事実の統合・比較・連関——最後に相対化されるのは何か

#### あとがきという名の謝辞 (小俣ラポー日登美)